百人武將傳

全

又 5
6001

百人武將傳序

四海をづかひして岸の姫松枝をまじへ
駄代をれば弧を櫜し藏め干戈ハ巫と寢
國を民饒して恭敬を古代に新
し利窮し土地を爭て人士を殺し城郭
に盈むること亂世に事ありて人倫と定
貪獸ともの者ども似うるをいへども要
懲し善を勸め功を賞し罪を戮おそれハ文
事武備ともに欠ぬ故に本朝神
代乃往昔より下天正の始まで數千年間

実ち貧を集るの業盛なりとなしてそれ
実は勇臣なるを捨てて其の支族類族
ひとしきをもつて奮くしてこれを拒して幼童児女周く
覧るとわさまに故と今柳美豪臣の四烈
あるを百人あつむてそれ容貌を図像して
の事仇を讐し偽れ其の判事を附して百
人武は倍と名づけて事を捧ぶと知れり
毎恨らくは猶の短して事を世ひとを
然るを問ても実は摘て素毛の代に蓄積
積ぶるをよしとなり

道臣命

道臣命は神武天皇の臣下なり
神武統あるとき東へ行幸なるとき
道臣命と出て
大伴と次八咫烏
ひとちびきゆきて
敵のたち伏兵
猪といのものを
ひつがせ神武
つこびゆひてたる
臣命は爾の名とい
又たれは伯坂邑といふ所をゆる
は人一名を日臣命とも云て
大津武と号ものてこの四百年まるきり

大彦命

大彦命は第八代孝元天皇のとしの人なり小陸奥をたいらぐとなりて北陸をうちまつぐんこれを教向せらるるとこれ武埴安彦といふる天皇の一族しかんもとるもとてていたぐ[illegible]の都へうつり武埴安彦と泉河とて武埴安彦とうち敗しそのちまたもしたのこてぐちうちまつぐん年と色てゆきう

武停川別

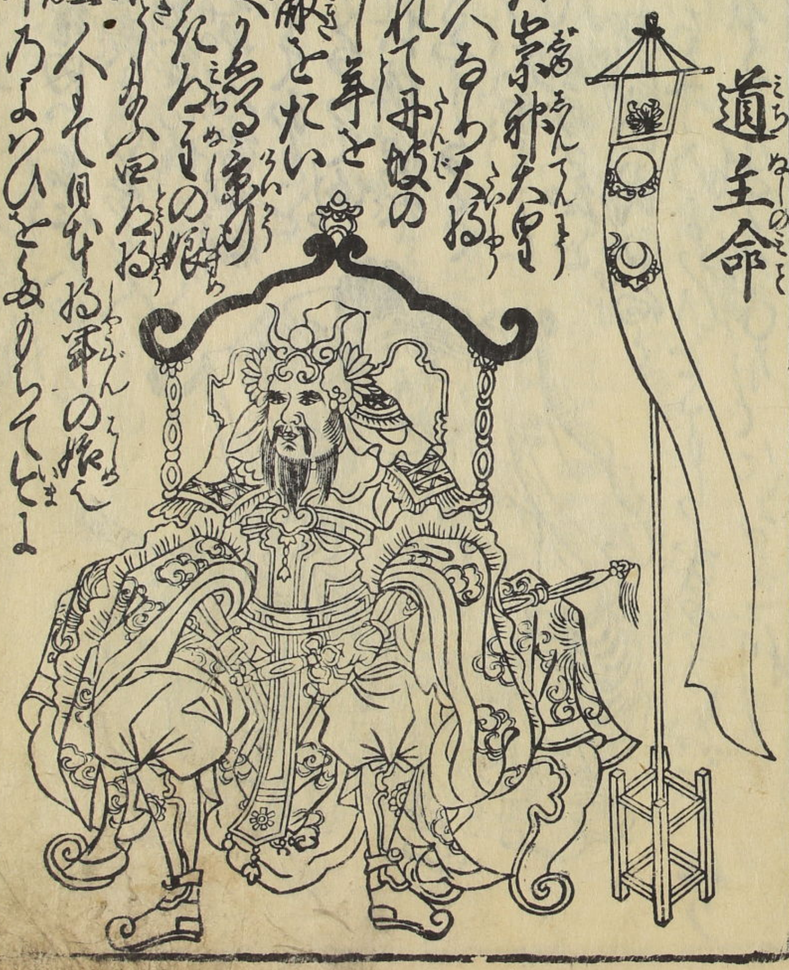
武停川別は崇神天皇のとしの人なり東海道をたいらぐとなりて[illegible]年と色てゆきうとなりて下向し東の夷どもをうちまつぐ年と色てゆきうとなりてのちまたもの振根といふもの勅命をうけしりしと武停川別彩得て誅せしめ天皇勅命をうけ武停川別そのうちに一人なりよりひこ百第歳今はいるわしてこゝに第[illegible]

吉備津彦

吉備津彦は崇神天皇のとしの
八月の初め
ごろ
ある日
そのうち氏浮川男と
ひとりく動とうけも
いかりて
と
ひとりの
二百余歳とうけて
今はいくとしの年まるなり

道主命

道主命は崇神天皇
のとしの八月
ごろ
よりはじめられて丹波の
国へ向かい年を
ねて敵をたい
らげて
天皇のとしの
とりし
年のその一人
二百余年
いるとしてこの年の



上毛野八綱田

上毛野八綱田は崇仁天皇の御
子にて性格温和にして人
ひろんしの勇士の誉高く
こゝろ上毛野八綱田勅
をうけゆゑあつてあまたと
せり矢とりてはなつて
とゞまられば特に猛者
なぐるさやうなくて
勇紀りつ矢四ごこと
とかゝて八綱田づ名を
わるくして四の武田四
ひとつとして武勇の名をとゞ
ゆひて二百年ばかりでにるまり
餘ましてなどゝ

日本武尊

日本武尊は景行天皇の御子
なり武勇の人にて十六にて熊襲
を討ちて二年帰り
付いてのち東国を平ぐん
として伊勢を経て駿河の国
賊徒を平げ給ふ
賊徒を平げ給ふ
賊徒とは草を分けんと思ふるを
賊徒とはなして薙ぎ
火にて敵のうちへ
殺さるこゝろ賊徒と
伝年三十四にて亡ぐ

御諸別王

御諸別王は崇神天皇の
御子豊城命といふものの孫
にて天皇より
はくくしてまつりて
勅をうけたまはりて
東西を鎮撫
蝦夷どうらをいさめ
その地をしりて東西鎮撫
する孫なり東西乃国復し
こと百年のちひとつとして
凡二千年かどをしるすなり

武内宿禰

武内は孝元天皇の子孫にて
紀氏乃祖なり帝に奴隷
付衰神功皇神仁徳の
六代よりへてなり乃
友となりて元日本大
臣の職をしに神功
皇后のれとりて
新羅百済高麗をうち
そののち皇神天皇の見
西越をしたがへ乃新
武内ひとりとして西越を
皇神のに仕ぐまりに仕徳の時に武内二百十七才
にて死しかの今すて凡二千年かどをしるす

大矢田宿彌

昔やこのくに[illegible]
大矢田の宿彌と称して
の陛下ちかい[illegible]
うちゆふ紀大[illegible]
をこゝろ[illegible]
ゆへよ[illegible]
ひひとと[illegible]
あなにのこ[illegible]
こ[illegible]
ちくそのト[illegible]
ちくびを[illegible]
[illegible]
[illegible]

田道

田道は仁徳天皇のとき紀ろくに
新羅をせめ年の
貢をおこたりたれは
天皇田道をつかはして
伐しむるに田道の
数百人をもつて
田道の民をいはつて城
をもつてそのちに勅をうけ
ちくにおもむき帳夫を紀し
田道をうちわらつて
その勢大地をうごかして
くらひこゝろ[illegible]
死をとゞまりて[illegible]

大伴金村

今村は二貫天皇の人なり
天智天皇の時なり武勇
いとぐ位より即ち
手柄の者なりその武勇
武勇いうて金村と
なりて者多く敵の矢
石焼こ行り鮫を
良さの対しなりまた
つきゆひて今村と
武勇名ありて
うきひて教おの男大連
位とつ

大伴狭手彦

狭手彦は今村大連の
弟なり天皇のこれより
ありて数万の兵とうまきて
海としらやしる蒙と
海ごとも出交へせり入る
蒙出とそれてあ
さりわ狭手彦交
よわるとこ行のさ
寄ものとなりて
ならてやらとこ
平伏つくし狭手
その名とは浦伝
多人といとて

こ百年ばかりに

阿部比羅夫

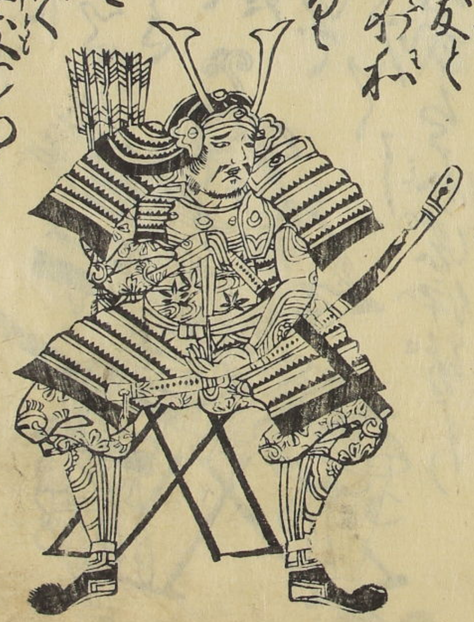
阿部比羅夫は、海路の天竺の
と云乃人をもわ天竺の
をもりて、あなのたゝかひ
ものして、帳夫ゞ倫と
世外人さいくゞ名ゆまと
書情世とうけてせる
鷲と鷲の皮をたく
と云ゝうけて、鷲ゝ
そのちゝ世わ世のあ
どもいおこゝはれば
船はの大船とうけ
作ゝくゝ不為ゝをゝ
とゝいゝうけて、ゝ年一年ゝゝる

朴市田来津

朴市田来津は、天智天皇の
と云の人。大唐より百
せしゝと云百済ゝわ田
かゝりとこゝ天智田来津は
百済へ行ゝ次田来津は
百済よりいくまでも百済
田来津ゞけゝもとゝ
ひゞゝるゞゆゝ一男実と
られ白江にといゝるゝん
敵と云ゝ津ゝ津ゝ先ん
くゝゝを大敵ゝとせ
いゝて天ゝあゝゞ蕃
方の兵数十人と敵して

高市王子

村國男依



大伴吹負

大伴吹負ハ天武と大友のせん
のとき天武のかたへまいり
やまとの國をせめとれに
あれ河内の國をうちとらさ
くみれど大友がたのいくさ
いかにして志がの都をせめ
軍兵をつかハして吹負
ともにせむるに吹負ぞ
むかつて大友の兵をさんゞく
うちやぶること天武のみ伊勢より
おびき出て大友をせむ大友が後の敵とかせこさ
ゝてたゝかひよりてひれ志かれバ吹負が手柄ゆゑなりと
大和とふりてせんの劍おゝしやうあり

聖武天皇の

大野東人

聖武天皇の天平十二年太宰少弐藤原廣嗣
むほんをくハだて筑紫九ヶ國を掠め
肥前の小値嘉嶋にて
よばゝる天皇東人ハ
と大將として兵おの
出すて兵をさしむ
廣嗣ハ一万騎を
の兵をひきいて板櫃河より
陣をとる東人その下つかさ
佐伯常人安倍虫麻呂と先
をしつけせんと廣嗣さちりぢりにけしおける
東人おひかけて肥前の國松浦の郡にて廣嗣をとらへ
殺してその首をせいせんせよかくそまで九百六十四年

藤原藏下麿呂

藏下麿呂ハ大織冠
鎌足の曾孫なり称
徳天皇の天平宝字年中に
恵美押勝といふ人
叛逆をくはだて朝廷を
うらみたてまつりし時
宇治へおしよせ
近江の国へにげ入る
軍をひきゐて押勝が陣の
前に旗をたてそ戦ふに
おのくもたと藏下麿呂後ろ
より攻てふく押勝つゐに敗け
殺されぬこの功によつて從三位となりけり

四十二さいにて死す

坂上苅田麿呂

苅田麿呂ハ聖武天皇のときの人なり
村麿が父にて武勇のほまれあり
恵美押勝むほんのとき
苅田麿呂勅をうけて押
勝が子訓儒麿呂を討
これそのときの功者の
名誉しるしたる
田村麿呂の父にして正四位
をくはへ給ふ
ゆるしてのちに苅田麿呂
あまたと共に光仁天皇へ
たれば位を賜りて苅田
麿呂ハ正四位下を授けられ陸奥守となりけり

五十九歳にて死す

坂上田村麻呂

五十四さいにて死す

田村麻呂と弟田麻呂とは
兄弟共に勇猛の人にして
のがれがたき天皇の
御勅にかなひ征夷大将軍
うちさいごまで征夷
のち忠仁公の
京の仲間にくわはり
平城帝の変に
わかそひわつとして
弟田麻呂と共に
仲成を討しまゐ
わつと変大将軍
にてとと八百六十三年よりある

文室綿麻呂

五十九さいにて死す

綿麻呂は征夷大将軍の駅字ふ
ひさまく奥うちわたりて武名と
わかく次郎俊宗の
大将軍にて
大内裏をぶんぶんゆり
田村麻呂と綿麻呂とは
ゆくてわり無敵の
ゆくばしりうつのち奥と
勅のたびにこうとうる
綿麻呂和とうけゆりて
あまをさいぐ大内裏
征夷とさづけ征夷大将軍に
任ずるとともに八百六十年
第一番のあるなり

藤原利仁

利仁ハ藤原の長谷の後裔なり延喜の帝の御宇に
わかゝりしかゝ時分より弓馬の道に秀ぬ
勅ありけるに利仁
やくにたちて利仁
しゆくゝわかゝい敵ゆ
んてゆくゝ波いざ
やこゝすゝ敵うちに
して
とゝ
れば
利仁
この人ひとりさ
ゝとゝ
ゝ

菅原忠文

七十五歳にて死す

忠文ハ菅原道真の孫なり天慶の
武勇人にすぐれたりとぞ
承平年中に平の将門
東国にあらんのくにと同く
天慶年中に藤原の純友
反逆をくわだてしかれ
とも忠文をたゝかはす
事ふかくしてさしもの
敵ゆゝしき
敵ゆゝしき
ゆゝしく
ゝ
ゝ

平貞盛

平貞盛ハ桓武天皇の後裔なりしが
世に名をあらはしける時
貞盛に仁わたるよわてひそその
いてこれを退治ねつはしゆうん
わかいねつはしゆうんのくん
わわくこくとまるとて
とまられぐもしげどもて
ゆこぬわんのごくねつ逆ひと
おこし者濃ひゆへいるわて國香を
ちうと貞盛者ている矢よわうてるうと
ねつくこくふねつ貞盛
ふと思御者とれうの年多の藝器ひくちゆきつ

藤原秀郷

秀郷ハ天徴年間ハ田原の里の
後裔なり大わの田原の
して中くるゆへ田原
たといひうり又俗云へ入
て俵とはるゆへ俵藤
だと号次とも云ふ先
崔浩の説とに平の
つひわんをにしるに秀
郷貞盛と一味てねつ
者とさふその弟城秀ぞよ
ねつんをるもの多ー
俗云佐下小叙せれ武
今のゆ長沼谷吸下の色赤の武士ハ秀つぞ

小野好古　八十四歳よりそなと

小野好古は第一流の人なり
天慶年中に筑紫の純友伊予の
よりしたがんとおもしかれども
とせあかと先ゆられて帝
好古と大将として追討
せつらる好古伊予の
筑紫へ純友しうとう
友は海上とをてたゞ
ゆきてせうとうを
とうごひられど九月
紙ゆをおごうる筑紫
もいるるにおよんで
うをうひ伊予中よりてつるよ純友をせ捕りるとし

源経基　四十一歳よりそなと

経基は清和天皇
の御ゆごして貞
純親王の御和歌
貞純は清和の
よりみちるゆへよ経基の
山なと云孫也とり
給て源の姓とのの清
源氏清和源氏元祖
経基ゆ一ゆ
異とゞれうゆ
ゆ文の高名
事也よりもしさ純友紙代のうちあ也よ
と回くれもひれてところる事ゆわりしくし

橘遠保

橘遠保は井手の左大将橘諸兄公の
孫なり弟嵯峨院の天慶
年中に純友ひりんれ
を保和命をうけて
伊豫のうちをもり獲と
純友等府の衣紋を
とりしるして伊豫の
へのくさへ出とれを保
いでひうくくさんくり
ちうそつるよ純友といけ
ちうそ眼りをちうその事
ちうよりいちぶるし橘正成いを保
孫なりとせういひつとるるり

源満仲

八十八歳にて死

満仲は清和天皇
の勇孫貞純親
王の孫経基の子
武勇のなわるにしてい
ち弓馬の道に秀じ
又はるるとも源氏
の勇れこの源氏の教
を受しとひさ源繁延
及遠のなわるとくくるる
の後堂に教東を隔てその
ひ教ふとうあるとして
事はわり年をて橋
今に拾品を西宮の浦

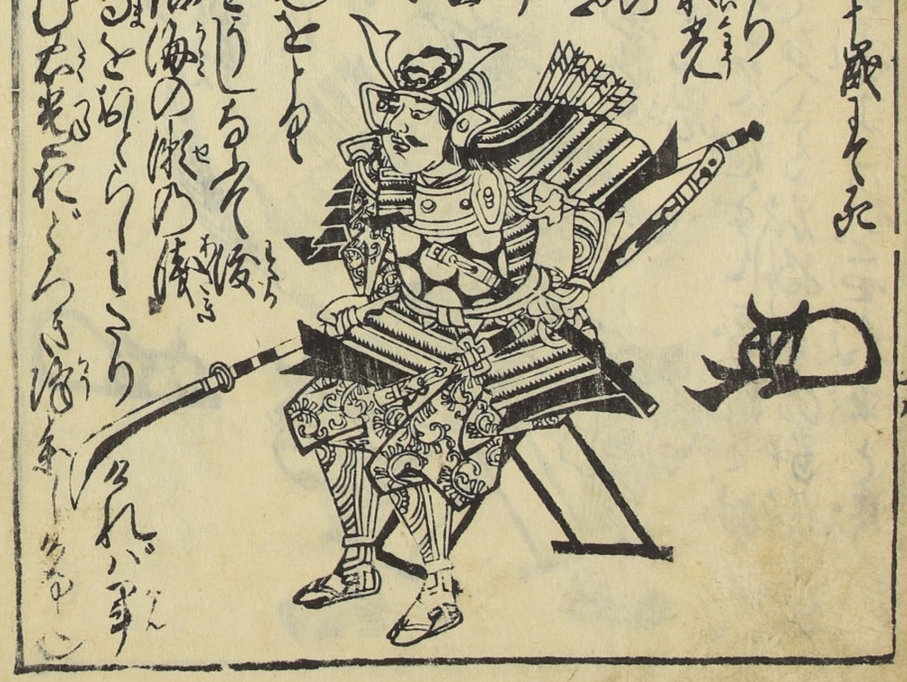
平惟茂

平惟茂ハ平の兼忠が子にて
貞盛が養子となる生れつき武
勇人にすぐれて智謀に
長じそのゝち奥州に行
頼し鎮守府将軍に任じ
いろいろの武士と西国の
お揃して後惟茂が
鎮へ大防ぎをせさせ
それハ惟茂ある漢して鎮に
火をとぼしその身も死人の中に
まぎれて御後のわつまるまへらけ時刻をとられ
さがめて三び後何をうちやぶりそのゝち信濃守
兼ねて勇気ほうとうちあいしめをましてとりおわり

源頼光

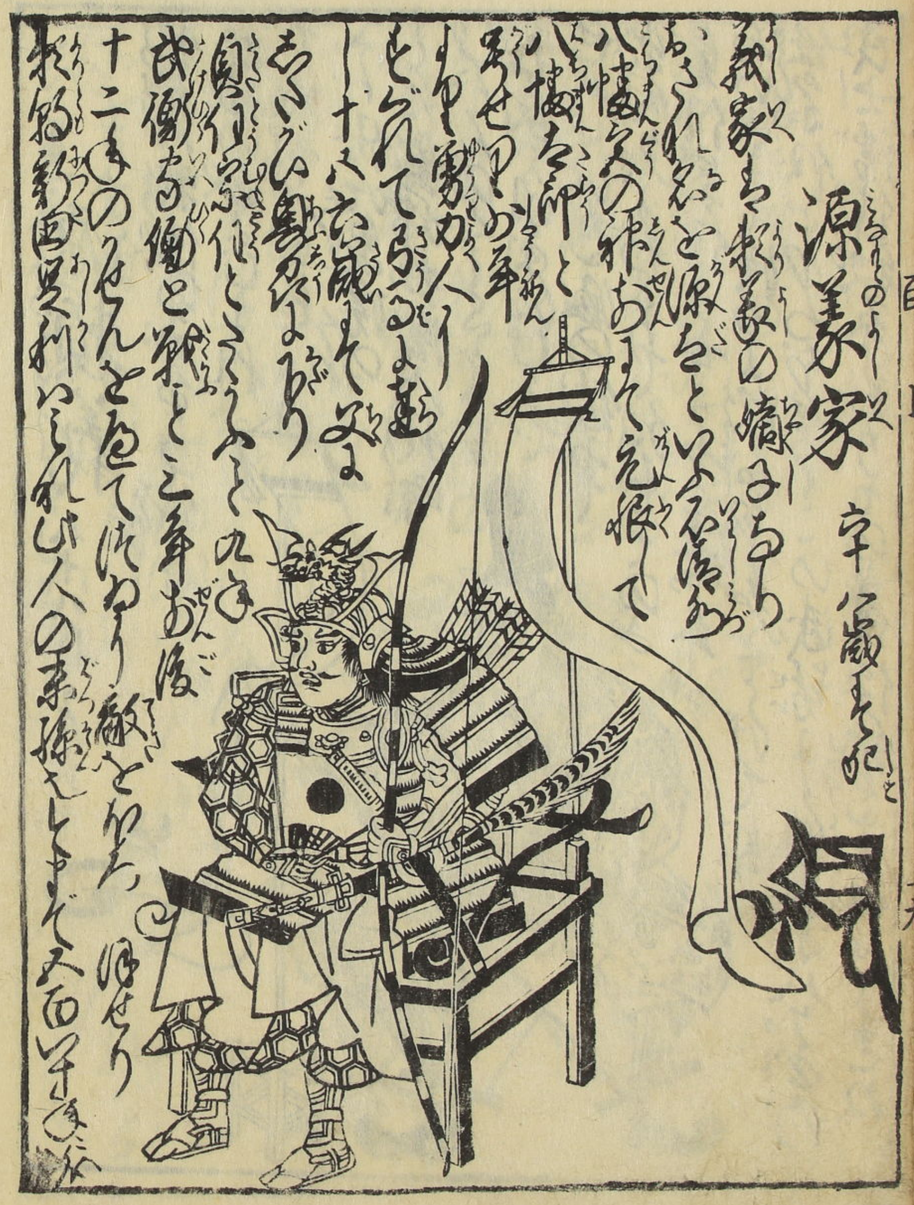
頼光ハ多田満仲の長子なり
摂津の国に住して鎮守府の将軍
となれり智謀人にすぐれ
武勇世にならびなし
平井保昌をはじめ渡辺綱
とうの家臣をもとへ
人民をなやます頼光
勅命をうけて酒顚童子を
のがれるの四天王
また牛の後よりかりねする鬼
同丸をきりて蜘蛛のせいをきり
まことに射芸妙術の名をえてその家臣に綱
公時貞光季武といふあり世にこれを四天王と号す

源頼信　六十歳まで死



源頼義　八十八歳まで死

源義家



清原武則

源義光

七十三歳にて死す

義光ハ頼義の三男にて義家のおとうとなり江州新羅明神の社のまへにて元服せしゆへ新羅三郎と号せり家衡と奥州にてかせんせしとき武衡とかたらひ義家が官職を義光へ一旦のたすけとならんため下向しわたくし義光のちへきこゆるのにも逆してその紀式部にも後世の法華経をよむとの佐竹武田小笠原などハこれ義光と祖とせり義光の子孫なり

藤原清衡

藤原秀郷御が末流なり清衡ハ父を経清といふ也安倍貞任が与党としてあらされぬ武衡家衡しかるのち清衡ハその一ぞくとひきゐて義家のかたへまいりつゐのちからとなりて武衡家衡とたゝかひ家衡うちて義家清衡とおしはかり陸奥出羽の押領使として鎮守府将軍となしその子基衡といふ四代つゞいて出羽奥州を受領せり

平正盛

源為義

平清盛

六十二歳にて死す

清盛は桓武天皇の後裔なり高望王の孫
平良文の子孫なり其祖父忠盛は
殿上人にして平の姓をゆるされ
後に平朝臣と云ひ平氏と云ふ
其代の後ろ盾は藤原氏なり清盛
は忠盛の嫡男なり清盛の
河内守に任ずるの礼に鳥羽
平治の乱よりこのかた
ひとしく平氏わかよ
ひとしく支配仕候ひのまく
ふとくこと果かて遂に一族
ますでよりて天皇の元に安
駆とてやうとて海とわくこと

源義朝

三十八歳にて死す

義朝は為義の嫡子なり長男なり
武勇の誉れ高く
為義の跡を継ぎて
後白河院の御代
平治の乱に敗れ
十六歳の武士と義朝
源氏の棟梁となる
元と平清盛と同じく
義朝は東国に
と申す
又せんとて
名を義朝と

源為朝

三十三歳

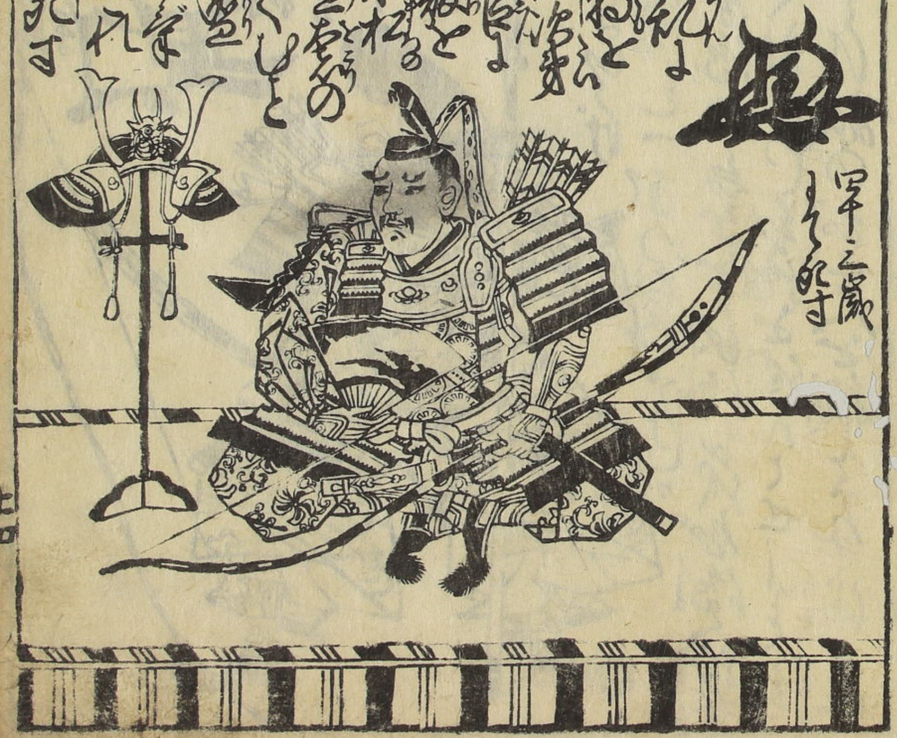
源義平

二十四歳

源頼政

七十六歳

平重盛



平教經　二十六歳

源義仲　二十一歳

源頼朝

源義経

平廣常

廣常は桓武天皇の末孫平氏の流
と称し伊勢国に住せり平氏の家系
なれども弓矢に勇みあるの人
いくさに臨みては敵わるとも敗
れず川へおしつめの時
廣常こゝろ強くして
とゝにかゝりて手負
なし廣常は作者
綾女のように美男
ましませども廣常を福
こんどとしてしたしむ
せつとふるとも敗れず

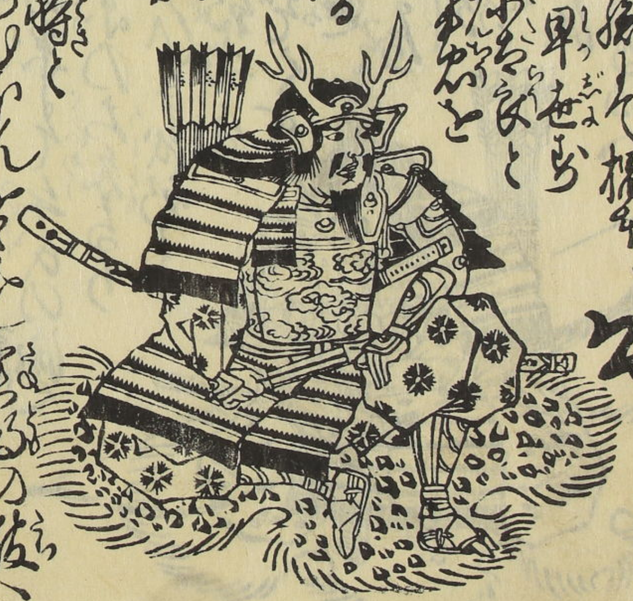
子業平常範

八十三歳

常範は桓武天皇の末孫平氏の流
れ弘仁年間に生れて家系
保元年間に至るまで
三代にわたり北郡
の主でしつゝのくさつ
つまくかゝりしまの
対のくさ絶えまなく
てゐるおよりもしさ奥
代のくさ一おのたゝ
るいて手柄とし
常範こゝろ共に
敗れるまと勇み
云人わらるる敗れる仕合

和田義盛

義盛もこと浦家の名ゆ孫にして相模
の国の守なりしが其ころ家の中に男
義盛と和田小太郎と和田小次郎と
いふ人ありて和田小次郎はいとも
ぢくせものゆへ伯父の
別当にして盛とる
ねたみ憎悪ひせんよ
をそれとおもてなしとる
しかれども義時と遠敵



盛

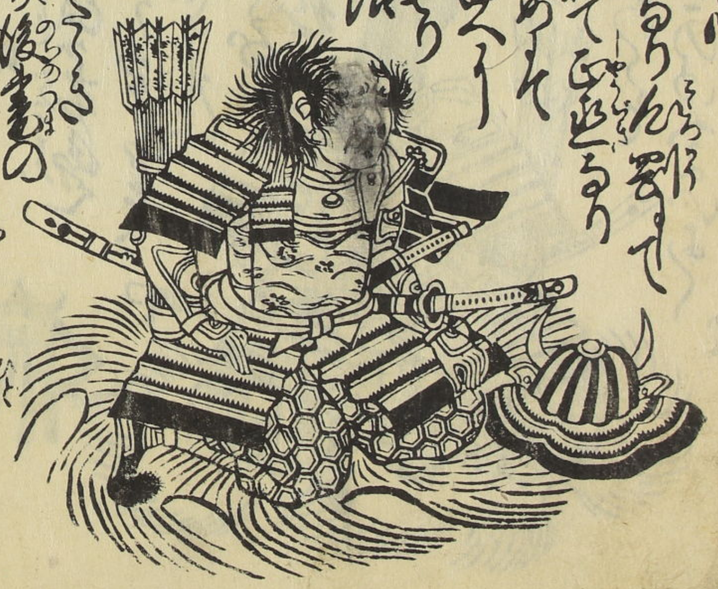
ちからを恃みて
実朝のしたしみ
盛の
盛物とおもひてひてのちひかんをもと
也一ひ揚れをるるあとを
盛

梶原景時

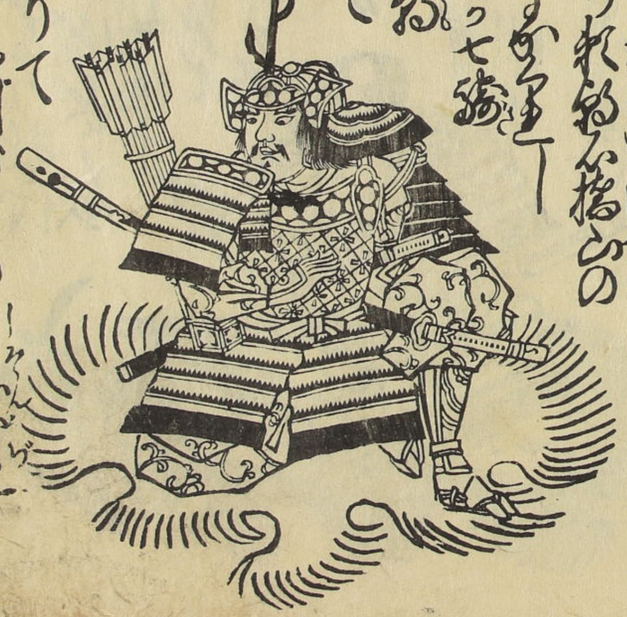
京時は源家相伝の郎
なれども
のりせんよ
相模
摂津
とよくまーと
景時
つ
思ふ
のこれ梶原と
しし
ぜアー
中国
二
梶浦
ひて
敵

景時

畠山重忠



土肥實平

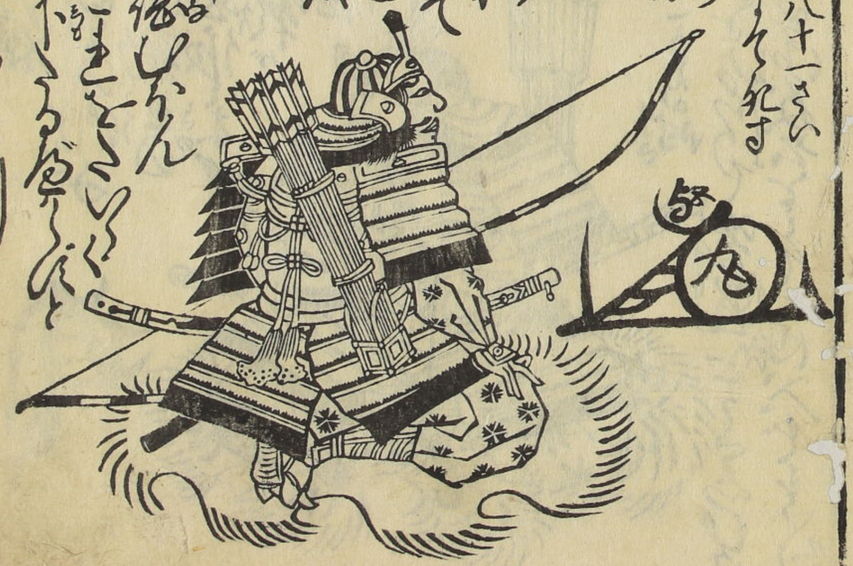


三浦義澄

七十代さいそれす

小山朝政

八十一さいそれす

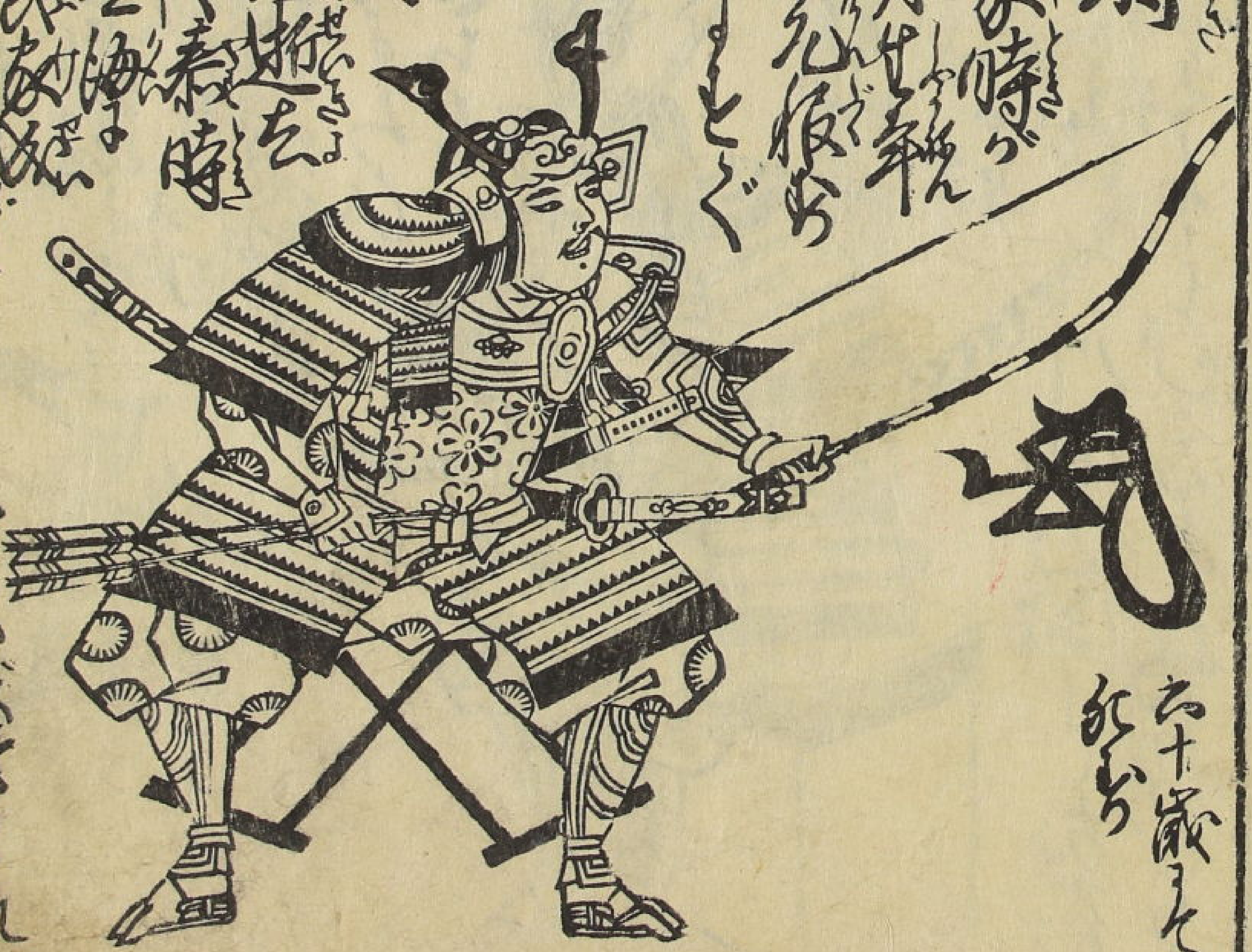


佐々木盛綱

佐々木の先祖は宇多天皇の御子敦実親王より出で[illegible]近江の国に住して武士となる[illegible]秀義が三男なり[illegible]頼朝に仕へ[illegible]藤戸の海を馬にて渡り先陣をせし[illegible]その恩賞に児島を給る[illegible]城資盛が[illegible]ある時盛綱討手として[illegible]

北条泰時

泰時は時政が孫義時が子なり建久五年正月廿三日に元服して[illegible]和田義盛と[illegible]承久の乱を[illegible]のち天下の政をとる[illegible]泰時[illegible]貞永元年に式目五十一ヶ條を定て天下に施す今の御成敗式目是也



六十歳にて卒

足利義氏

義氏は泰時の孫にして時氏の子なり時頼の家の事務を執行の一族なり

川の先陣にて義久の乱に

海内十万騎のたれかうらぶれ

ぬくわが国の一族にて繁昌せり

小條時頼

時頼は泰時の孫にして時氏の子なり時頼の家の事務を執行の一族なり

源氏ありて武家を摧

天下の政をなすこと根源

ちからの強き人にて

入道して武家の政を

そのひとり際長時

時頼執権のあひだ

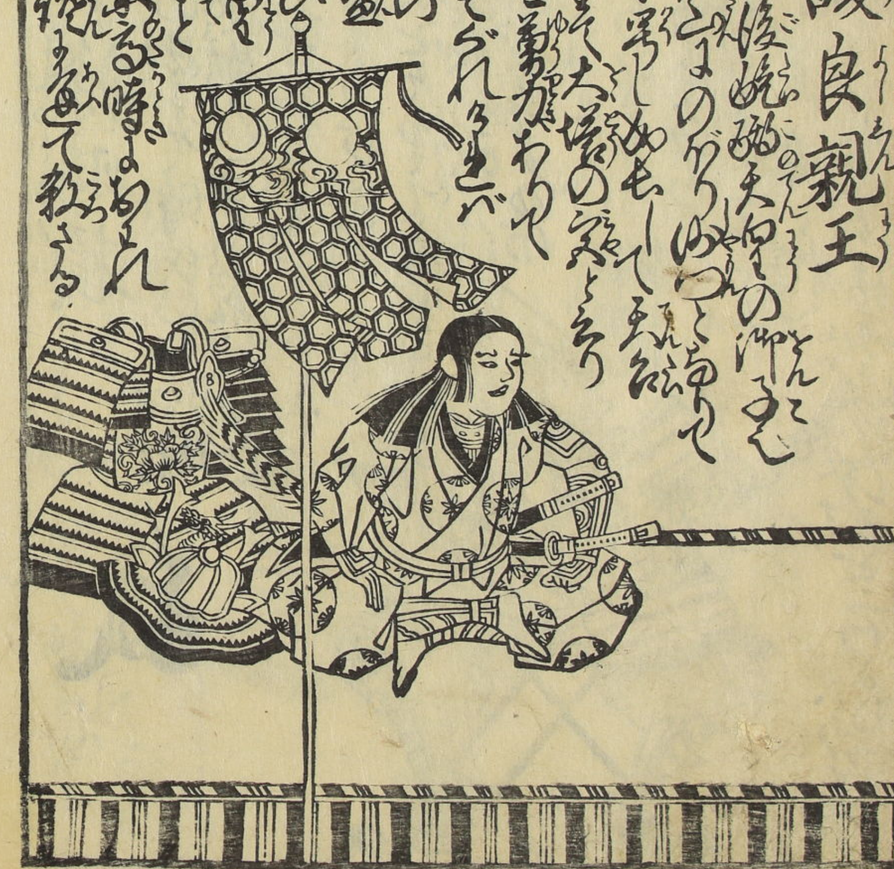
髪をそりて

七年とりて死ぬ年三十七

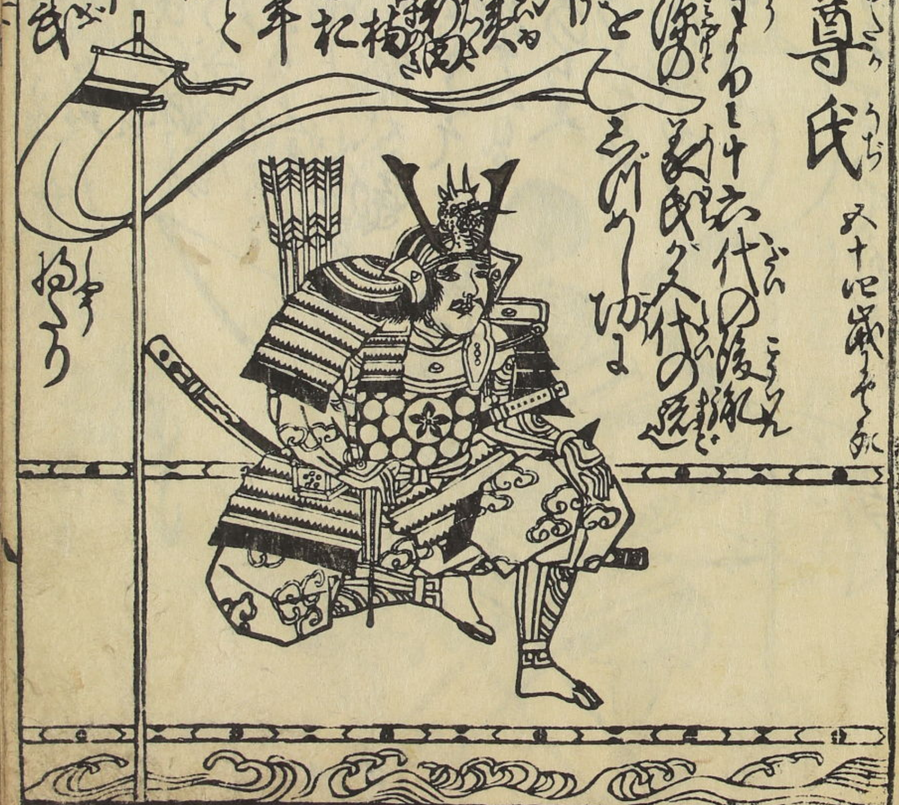
教代わりの泰時

拝家をよろこび

護良親王



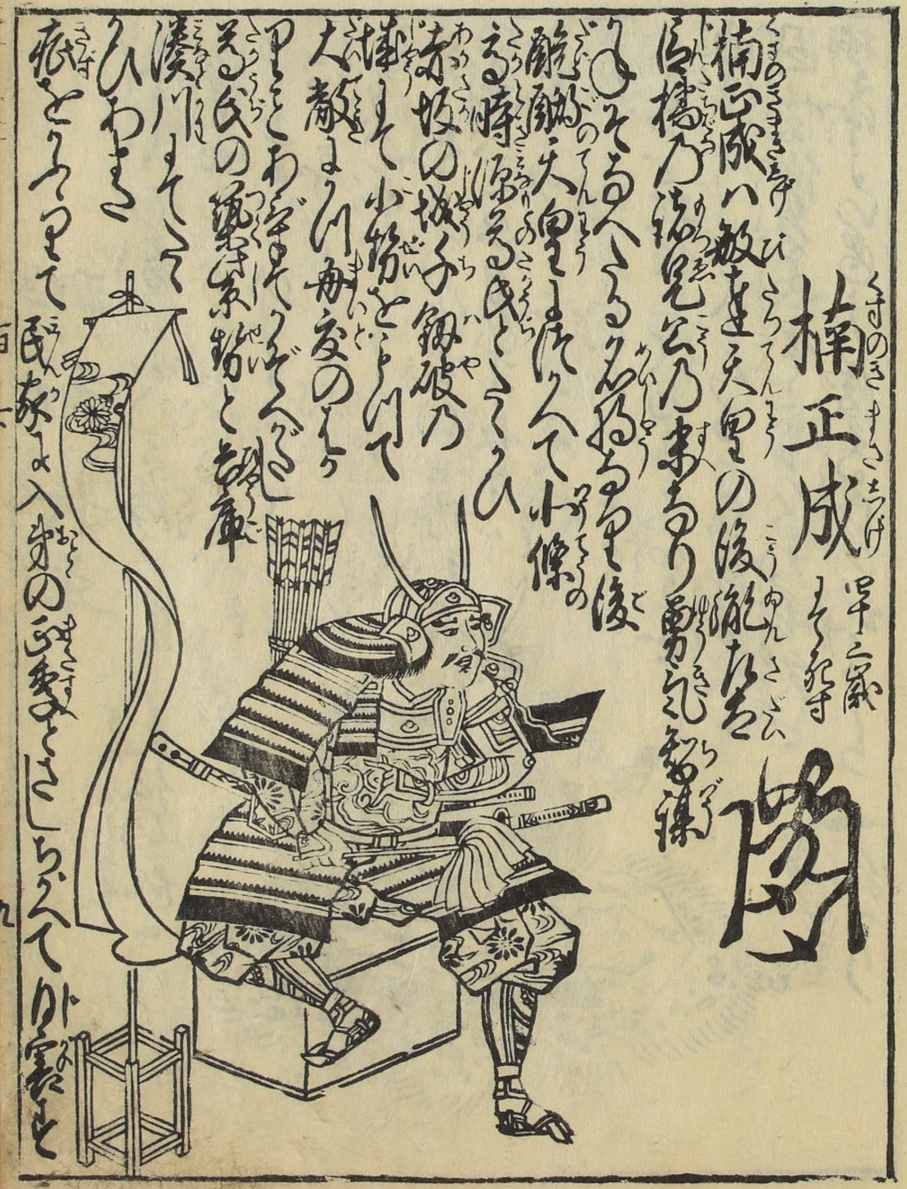
源尊氏



源義貞　二十七歳

義貞ハ清和源氏の流れ
八幡太郎義家の子孫
義主義重より出る
新田の庄に居住して小像
よりのち小像の
絵まりて武蔵
こうひ小像の一枚大
わいぐまるばしのち又
ゐる氏と天下をわるそひ
数度のひっせんを義貞わり
しが終の卍丸の
ゆせひるとら
北川まで流矢まわりて死と

楠正成



楠正成　年二歳

楠正成ハ数度天皇の後醍醐
に橋乃法皇乃勅ゐる勇ゐ
ひそてゐるゐ拾ゐ
醍醐天皇ゐ
ゐる時源ゐる氏と
赤坂の城乃
楠まて少勢をもつて
大敵ゐ
ゐ氏の
湊川まてて
ひわまる
死とうつて

那和長年

長年ハ伯耆の国のあきひとなり元弘の乱よ後醍醐の天皇隠岐の国へながされ玉ひしを元弘三年乱をのがれて天皇ハひそかに隠岐の国をいでて千波の湊によりおはしける伯耆の国那和の湊へこゝろひて長年が城へわたると聞て郎等ハ長年同心してみかどを入奉り天皇を船上山にうつしまいらせ其の忠勤よ因て伯耆の守となる大塔宮とも建武中より後名和氏の乱より

死せり

赤松円心

赤松氏ハ村上天皇の皇子具平親王の末流なり円心ハ播磨の国に住して武士となり円心まで世々弓馬を業とせり円心が嫡子ハ赤松次郎則村と名のりしが後入道し円心と号す大塔宮の令旨を受けて則祐二男律師則祐ハと兵をあげて播磨の国苔縄の城をかまへて入そ重より桜川の城ほろびて六波羅を攻めて大に勝利を得たり嫡子範資次男貞範三男則祐もまた武勇にすぐれ円心のちハ赤松氏と號

宇都宮公綱

公綱ハ粟田関白道兼公の末孫なり
右道の曾孫宗円ハ[illegible]
宇都宮に住し武士となり一ぞくひろく
なり公綱その家をつぎて[illegible]
太楠と号し北條家にうく
なる元弘年中楠正成[illegible]
天王寺へ又あつまるのよし
公綱ハ坂東一の弓取
として武士なれバ
公綱ハ七百余騎の勢を
そくしてはせむかふ楠ハ
の武勇をしりて陣をひきしりぞく
ある時ハ[illegible]時ハ[illegible]おる時ハ官軍に[illegible]て[illegible]

源顕家

顕家ハ村上天皇の皇子具平親王の苗裔なり
北畠大納言親房のみなり権中納言より
十八歳にて奥州の国司に補
せらる建武の乱に尊氏と
たゝかひて毎度[illegible]
ありしのち西国の師逆が
勢をそへて延元
二年八月二日和泉
のさかい安部野にてうち
死せらる生年二十一歳
なり後世のくんこう
おしまれしのち従一位を贈らるまことに
[illegible]の家すわ[illegible]て大敵を蹴散らし大功と云へ

楠正行

楠正行ハ正成ノ嫡男なり正成死ぬるよ
りひくくれ坂源氏ハ摂津国宿ゝて正行と
ひてしいらびの殺ようらるべし世ハ
世ゝ時節とまらてそと
わぶ者ゝと世ゝ世ゝて世ゝ
とゆいこんち三位ゝ
十一さいこ正めうろの陣
ちいよ敵とさいぐる
志どゝとまゝ世ゝ
のちにねゝそのゝとわぶて
るゝとゝゝひて無父の子
ひゝゝひね源氏ゝ世ゝ
しゝとちゝへてゝ

こゝみさひゝそ死す

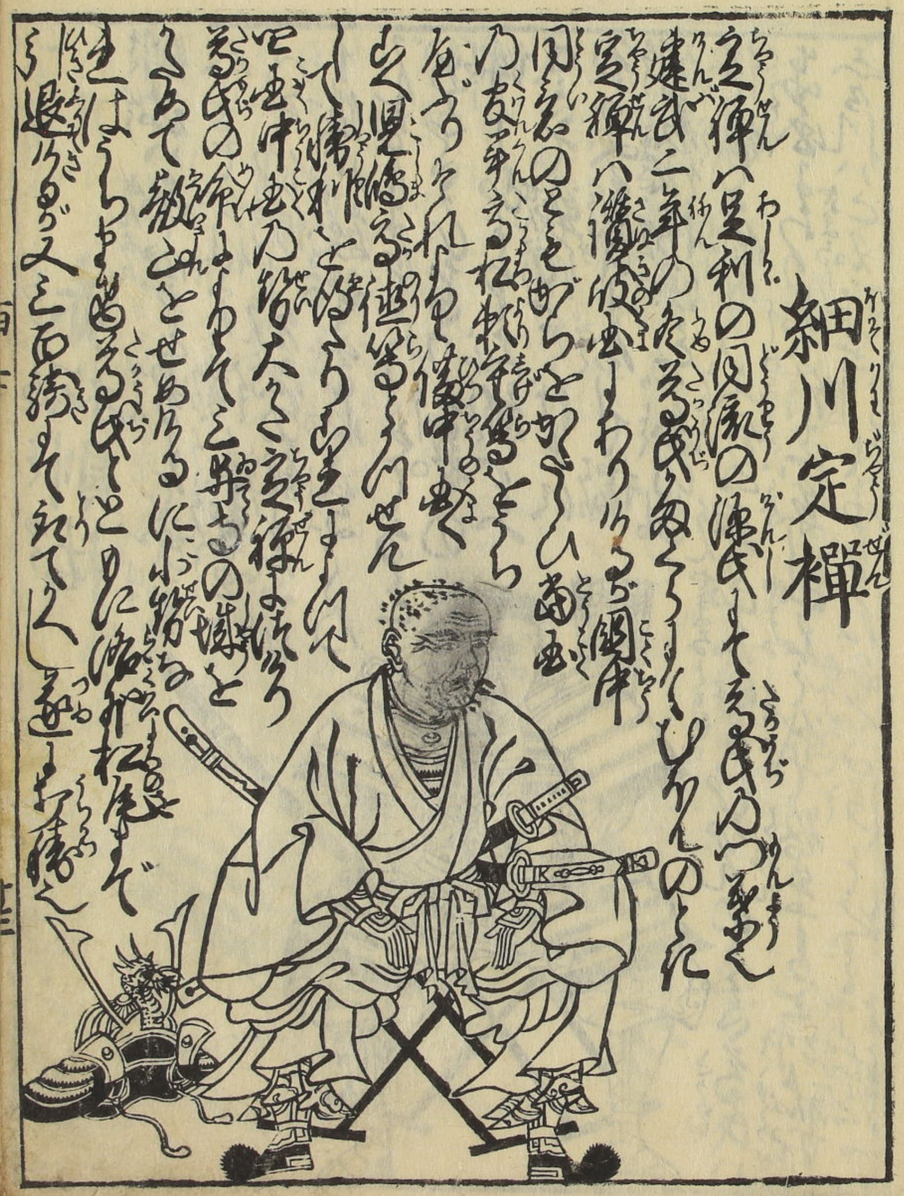
源義助

義助ハ義員の弟なりその家の号
と称ゝ孫ゝ義員ゝゝとれゝゝ
ゝそのゝじゝは義朝ゝゝ
おゝりる時とゝ
ゝんゝゝ後河出ゝ
どゝるゝのゝ義員ゝ
ひゝんゝゝ義員ゝ
りゝゝに家ゝ
ひゝ教ゝの孤場
武勇とゝゝ
朝敵のゝゝひゝ義員のゝ
ゝるゝ津ゝ義員ゝ
義朝ゝ平の古郎とゝ

足利高經

る強ハ足利たるゆゑ家氏の六代の孫
なれども家氏のあとをつぎくし尾張
と号ス建武二年の春竹の下ら
せんとする氏のせんちんをそ
なして友軍と成るゆゑせんち
ん丸の様なれども義貞
ゆゑまた矢ゑわるるて
死をとる義貞累代の
家臣
こゝろのたかる強ゆゑ
とゆゑして高氏ゆゑ
て高氏いろて強我ゆゑ
業わるゆゑ
ゆゑ強もゆゑ
ゆゑ

細川定禪



定禪ハ足利の同流の源氏ゆゑ
建武二年の春高氏ゆゑ
定禪ハ義貞出ゆゑ
同ゆゑのゆゑ
乃ゆゑ軍ゆゑ
なゆゑ
ゆゑ
ゆゑ
ゆゑ
ゆゑ
ゆゑ
ゆゑ

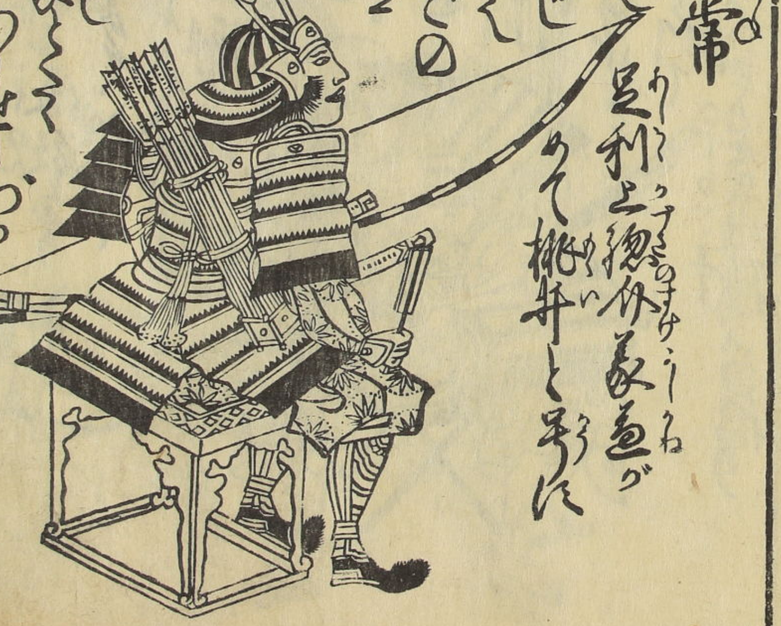
赤松則祐

則祐は赤松氏の一族にて武勇人にすぐれたり後醍醐天皇の御時元弘の乱に出て伯耆国船上山に籠る時の将軍名和長年と共に力を合せ京都を攻落し功を立て摂津国越前国の守護職となる

のち又高氏と不和にして播磨国に帰り赤松氏の古城に籠り高氏の大将高師泰と戦ひ文和二年山名時氏と共に師泰を攻落す後醍醐天皇より則祐に勅して板東より京都を攻落すべしと仰せられ

桃井直常

桃井直常は足利上総介義詮の家臣にて桃井氏の一族なり武勇人にすぐれ



播磨守護職に任ず貞治年間の頃天皇より直常に勅して板東より京都を攻落すべしと仰せられ

師泰と戦ひ平定せり

[illegible]

延元二年[illegible]の中くらいの弓を引て六百歩の中くらいの的を射ぬき

七十歩ばかりの所にて敵を射殺す

山名時氏

時氏は新田太郎義貞の次男なり義貞の後敵となりて
[illegible]時氏まで八代なり
わるものなる氏よつて所くの
戦場よりもしわたして武勇の
ほくわり遠江守友[illegible]
勇しかんの[illegible]と
[illegible]おくゆくと
つねてあらと思義
よ仏者の中とするる
[illegible]入乙世貞[illegible]
氏は[illegible]おくなれしうしてて
[illegible]仏者[illegible]

新田義興

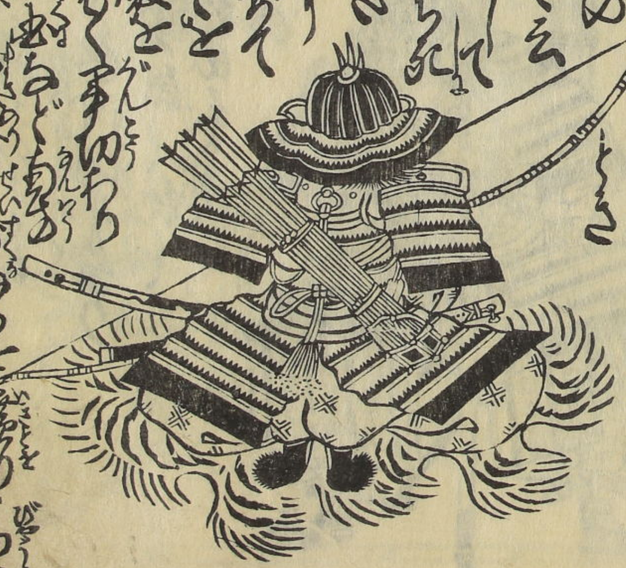
三十歳ばかり

義興は新田義貞の次男なり[illegible]
[illegible]
のはよしとして[illegible]
[illegible]氏[illegible]
[illegible]わり[illegible]氏の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

菊池武光

[illegible]

楠正儀



[illegible]

足利基氏

二十八さいにて死す　文和二

基氏は尊氏の三男なり　永徳の半ば
ゆえ　の数年ありて　典厩と称し
る　播磨守　武蔵の
武蔵　いづれ
と　伊豆の
孫　弓矢
せて　矯矢
ち　つ　切
ち　出　る
と　乗　る
ど　う　ん

源義満

六十一さい　応永十一年

義満は尊氏の曾孫にして義詮の嫡
男なりしが　春也といいしより
十歳にして父の遺位を継ぎ
して元服し　従五位下に叙せ
十七歳にして　参議に任ず
参内をうるびそ
ゆえ　武家
まじ　こと
法　と　し
で　廃　紀
と　も　世
ら　る
早　一　年

細川頼之

右ニ記シテ所等

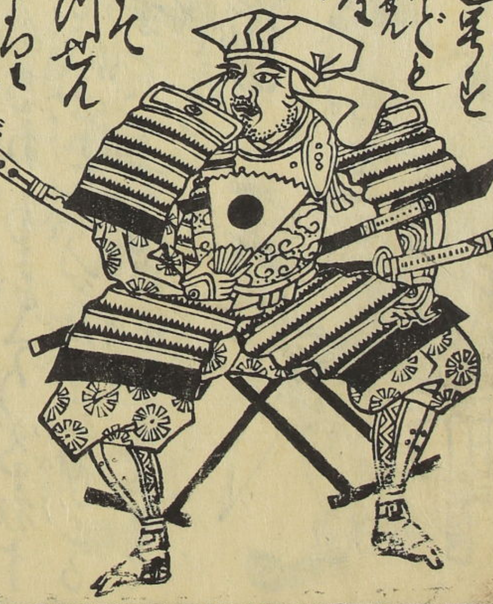
大内介義弘

四十六記シテ所等

畠山基國

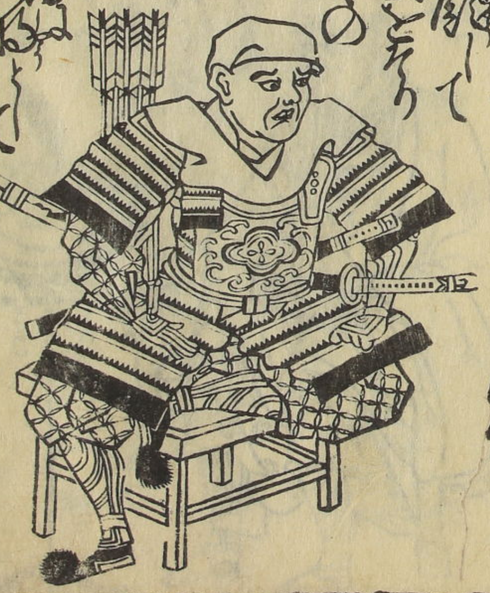
上杉憲實

細川勝元



山名宗全

七十三にて死す



小條長氏

七十ばかりそなる

長氏は平氏の末流なり伊勢
国貝塚の郷に住するものにて
伊勢の守元祐と号せり
後年世の人々もいひわるひと
とは條大和の名のひまをもて
いとその名家の実と
はまびうにせどのち髪
をとりやてうあ落し号
又ほうこんも捨せう法
年中伊勢の国姫路の沖へ
れしせ船くゆこせ
遊とこの條より行しに海
子孫さくなる

二 好長慶

三好氏は新羅三郎源の家光
より出りて代々阿波の国
あるやに住せるにより
と家号に長慶は三好
筋なる長輝の孫にして長
慶くよりの筋なるも
彩しのちは俗世を更
一、三郎一ぐくこ好京
こにはよせあこ流
しのえとこ完の條
ちらしその分ち
河内のくよ紀伊こ
海の岩倉とること年久し人くるおそれどこそ

毛利元就

元就ハ毛利蔵人大夫ノ子ニシテ後陸奥守安芸
の古国郡山城ニ居住ス武田とらと婚姻
の事ありしかとも久しからずして
敵陶尾張の守隆房と
海尾張の国にて
おりの合戦ありしかとも
元就ハせんさいを
てきぶんにして
ことに安芸国
長門備中備後国
悉く出雲国
ト引くべ十郎左衛門
病死せり

七十五歳

小條氏康

氏康ハ早雲庵ノ長子
摺ヶ原ノ合戦
和睦ス
上杉勢
勝利ヲ河越の夜
我ヨリ上杉ヨリ
の手ヲ
川越の城
攻ヲ
せめて
武田
信玄と
後所よいどん
事尾

武田信玄

長尾謙信

斎藤道三

斎藤道三は
正史をもいでゝ
武勇人もとれて
紹鷗わりの茶の
湯を学び
まわるもののちひ
さわと織田信長
嫁して信長
つゝ

織田信長

信長八年相模の国の
こうたい貢ぎものをもらう
織田のめよりこれ
親王を親王
ちうの
武陽
信長まで
ちう信長
屋引
十四
四月
九年六月二日
信長

織田信忠

年廿六さいにて卒す

[illegible]

柴田勝家

[illegible]

豊臣秀吉
尾張国中村
郷に生れ
その母日輪
ゆめにて懐
じゝ
のちあ
信長
つらは
して
慶長三年八月十八日伏見
十七年
六十二歳